

小栗外傳三編

肆

~ 13
3293
16



門 八 13
張 3293
16

寒燈 小栗外傳 卷之十四

東都

絳山戲編

第廿四編

勇威龍を走して亡鏡を復さ

仁惠士を憐みて旧室を見ゆ

とどりさりいげのせうぐんけ
らる小栗助重ハ將軍家より一色詮秀を討るるに御教書とテ清人と習小
主從京師出しと義量と薨去り世間の人公澄氷波踏のといひ物
騒ぐありしほどに便へき人もの世の動靜を窺ひし我持公の心合
普蓮院の門主我圓傍に還俗ありて我宣と号し多征夷將軍と名多し
く世に傳へし徳まはるはるに幾行も京都鎌倉に中不抄のりるに
世間再び不詳溢るりおまはり柳京後全確執の監觸がとるるに前將軍
我持公去る應永三十年の二月征夷大將軍に職を辞しあひ山自守を云ふ

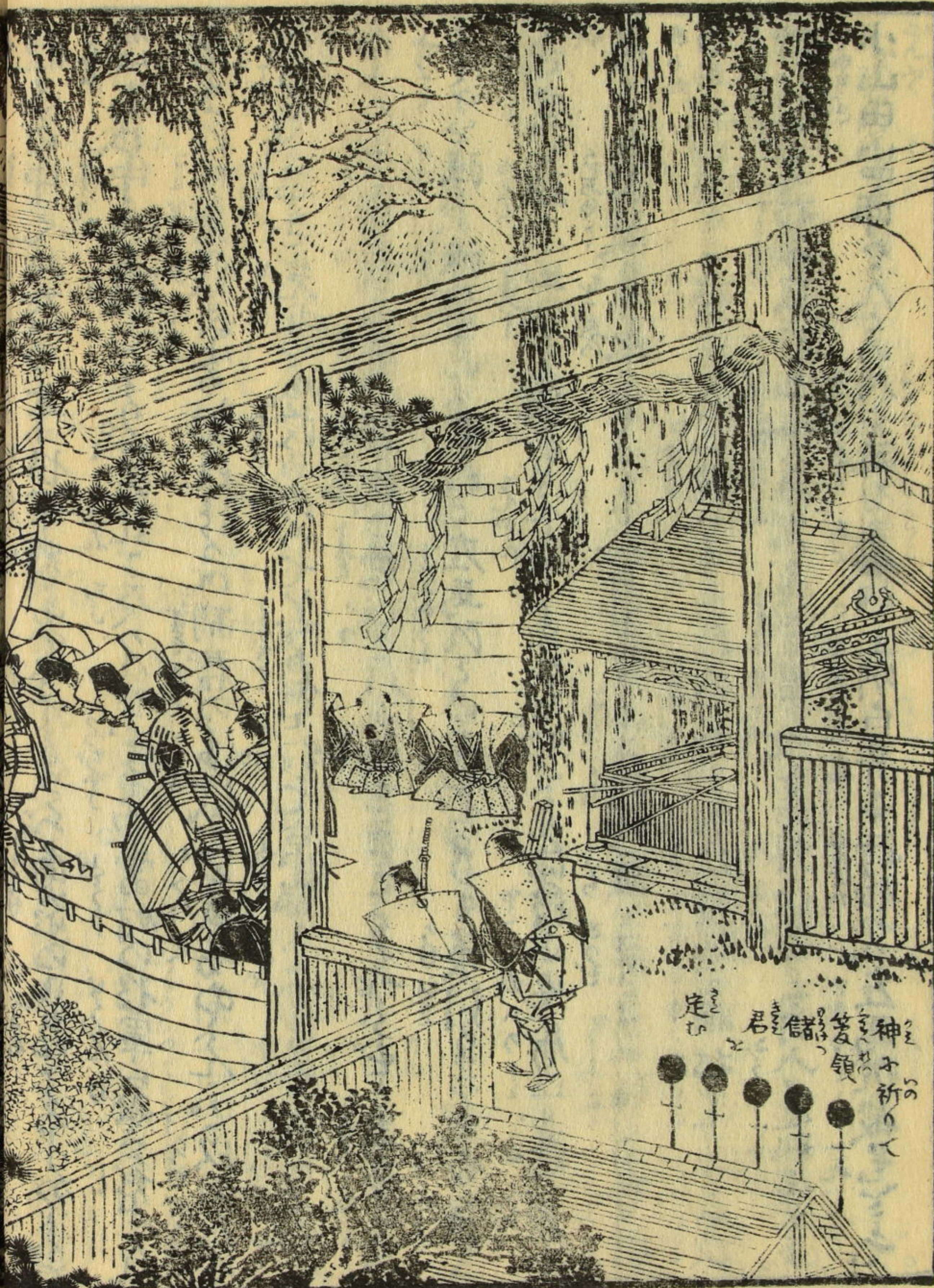
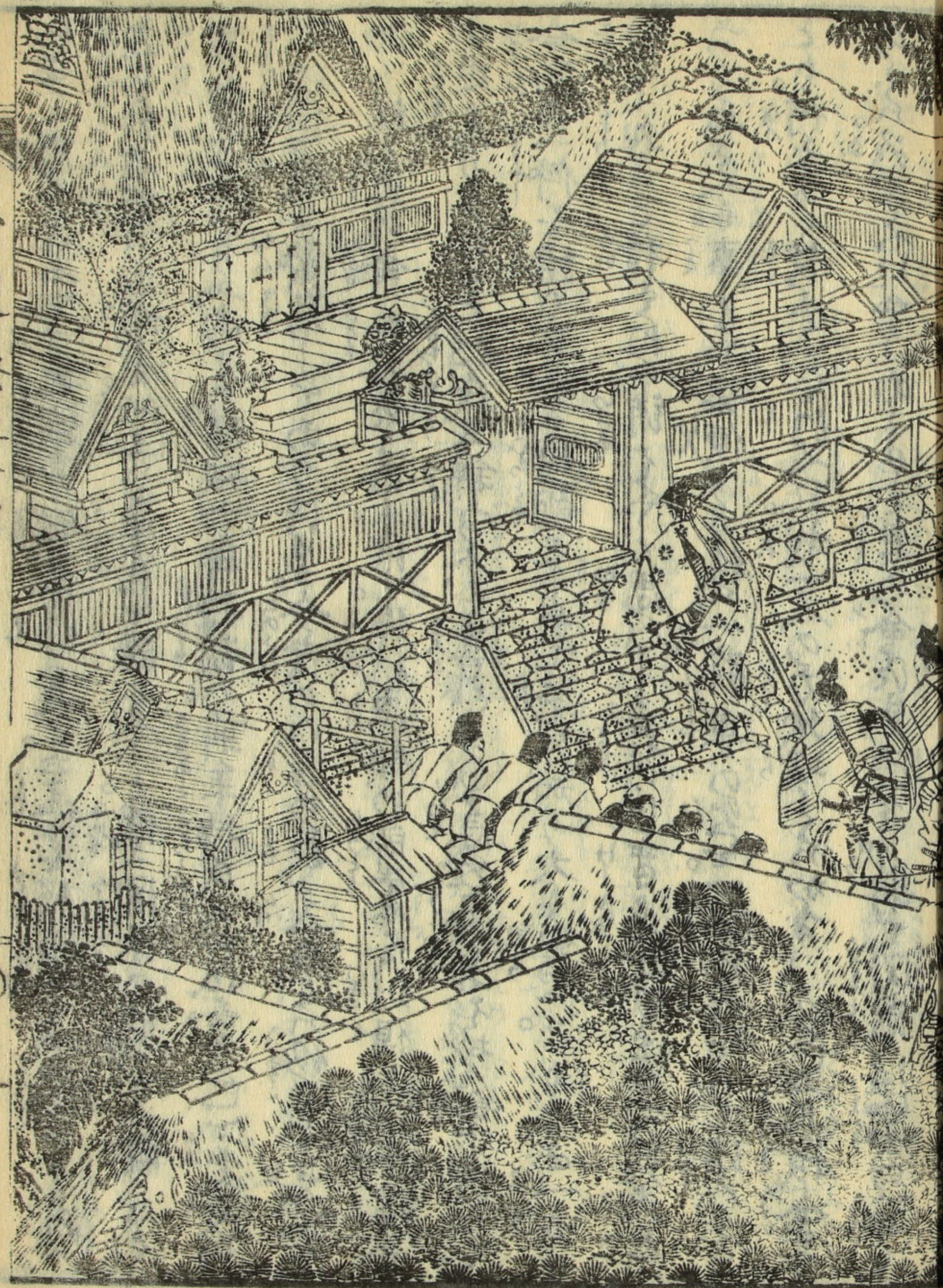
大正八年九月
本大學出版部
贈

箕裘を譲り。四月上旬ハ藩飾あり。世々道直静々天年ヲ保んとおぼし
 多岐中同三十二年二月廿七日。我量公世を早や多岐ハ。いさハ。諸君十九歳
 道号ハ翠山法名ハ道基長徳院殿と。し。なる。僅ハ。合ハ。櫛ノ。糸。従。ハ
 出。シ。行。ヒ。テ。忽。チ。一。朝。ノ。風。ハ。散。失。ス。ル。ヲ。憐。ル。リ。天。下。ノ。憂。ハ。一。極。耳。
 さ。ら。う。く。暗。夜。上。燈。火。ヲ。打。消。シ。テ。は。少。死。ト。シ。レ。バ。父。我。持。公。ノ。ハ。僕。キ。リ。ス。死
 中。ウ。ル。ハ。附。サ。ラ。外。ハ。世。嗣。ハ。支。マ。ル。キ。公。違。モ。在。マ。ス。カ。レ。バ。公。裡。ハ。一。カ。カ
 ち。ら。ね。ハ。物。思。ハ。シ。代。ヲ。知。ル。ル。モ。君。ヲ。ク。テ。ハ。い。う。で。天。下。ヲ。治。シ。テ。お。ん。ま。さ。お
 是。ハ。公。先。祖。ヲ。氏。公。ノ。定。メ。お。も。き。も。あ。ら。も。あ。れ。ハ。濃。倉。左。馬。頭。殿。ノ。弟。公。達
 賢。王。ト。シ。テ。名。子。ト。シ。天。下。ノ。控。政。ヲ。譲。リ。タ。ル。人。ト。シ。テ。領。内。ノ。輩。ト。シ。内。評
 あり。タ。ル。ハ。後。領。畠。山。尾。浪。子。満。家。ト。シ。テ。山。名。赤。松。以。下。ノ。諸。臣。等。此。年
 然。る。べ。し。と。し。入。り。も。な。く。危。角。ハ。月。日。ヲ。は。ら。ら。我。持。公。ハ。物。思。ハ。シ。ノ。積。テ。ハ。心。地

例。あ。ら。う。く。と。し。正。長。元。年。正。月。廿。九。日。お。も。き。の。小。車。ヲ。せ。め。し。今。と。と。を
 今。世。ノ。教。ト。少。く。と。し。入。り。も。な。く。同。十。七。日。後。領。畠。山。満。家。石。流。水。ト。シ。テ。丹。城。ノ
 勤。行。を。い。じ。や。ま。れ。る。は。今。前。お。軍。我。持。公。ハ。病。ハ。危。う。く。一。朝。ノ。憂。と。も
 消。さ。せ。ら。る。天。下。ト。を。お。も。き。と。ら。り。万。民。ノ。嘆。ハ。幾。許。キ。ヤ。僕。才。不。肖。う。り。と。ハ
 久。と。後。領。ノ。職。ト。シ。テ。い。さ。を。患。え。ら。る。ヤ。柳。島。社。ハ。源。家。意。後。ハ。在。ヤ。せ。ハ
 仰。願。く。ハ。愛。敬。心。ヲ。た。れ。も。し。今。と。と。ハ。中。外。ノ。二。人。ノ。公。ノ。う。ら。何。と。う。君。ト。シ。然。る
 る。と。し。ん。只。神。意。お。ま。り。し。多。岐。ハ。世。嗣。ノ。公。ヲ。定。メ。天。下。ノ。人。ヲ。救。ハ。ら。ら。せ。よ。
 二。人。ノ。君。ト。シ。テ。前。大。樹。ノ。ハ。舎。分。青。蓮。院。ノ。門。主。今。入。リ。濃。倉。殿。ノ。公。達
 賢。王。九。殿。之。此。二。方。ノ。名。氏。記。ノ。神。箭。ヲ。捧。ぎ。し。も。その。宜。き。を。お。ぼ。し。し。多。岐。ハ。見。を
 心。圖。ト。シ。丹。城。と。ら。じ。て。心。圖。ヲ。取。テ。三。夜。ハ。及。ぶ。お。も。き。我。圖。僧。正。ノ。法。名
 の。を。お。ぼ。し。し。足。は。く。お。神。意。お。け。お。知。と。ま。より。下。向。一。柳。島。ノ。還。君。を

予の老臣ハ斯と生るふも神意の指とす。いづて疑ふべきらと決定
 されし一變をがほ如く相立日午刺前將軍を討たるは本年世四より逆法
 同之月十一日より我圓修心を選俗せしめたり。義宣公と号しるは若將軍
 義持公少同母の法金身之幼也。青蓮院門主の室より出家し、
 義圓と号し、天台四明の法水を汲て自解公余の妙理を究む。止観二
 諦の教門を開きて、法法実相の深意も達し、内外二典に通じ、持歌及
 書、賢く一山の明師となり、多之れは才なり、帝がきり、好く信敬ましくて
 大傍に任じ、准后の宣旨さへかうり、門主の怨も入く、天台府主と成るひえ、
 俗性とし、傍位とし、今還俗ありて、天下の持を執り、あはれの本足かおし
 手とて、かて陳座の宣下あり、小除目せられ、從五位下に命じ、左馬路ハ
 任せらば、今年三十才、斯波左馬路佐義淳再ひ復願ふに任せらるは、京都

けり、つとむるは、諸おちのく、かひとるも、永享元年三月十五日、冬之儀、兼左近
 衛中將に任じ、征夷大將軍に補せられ、名を義教と改め、從三位に叙せ
 らば、比叡出仕の輩、身行入人の作法みり、せじれを削り、外振何公の族
 大名、法信の行跡を、まじりて、禁もゆるひ、自ら正道を復し、皆篤實に
 たり、これ我を、あつた、風俗齊淳、厚静溢の世とそなり、にたるは、將軍より、教と
 既、世に継ぎ、ひ天下の政道を執行のせ、あや、及、ひ鎌倉の左、源氏に
 通じ、此事を、世に、人も、ひ法師を、て、將軍職と、な、と、是、何の、る、所、と
 名、京都に、將軍家、終んと、せ、鎌倉より、これを、継、と、上、祖、尊、氏、公、定、め、る、人、と、み
 り、あ、ふ、く、は、く、怨、み、憤、り、これ、より、京都を、背、く、を、萌、る、ひ、ね、往、昔、基、氏、公
 逝去の後、遺言を、し、て、氏滿、法、兼、持、氏、を、て、こ、京都、の、の、り、元、服、志
 多、し、將軍家の、は、溝、の、一、字、を、傳、く、と、り、し、は、這、回、村、氏、公、は、痛、男、賢、王、丸、殿



神の祈ひりて
 爰の領り
 儲り居る
 定む

いふ怒りもふと一色詮秀討ておぼろ言詔を巧まきふ流言しむれば
左の及後怒るに堪ふ此上の憲実を誅せんと俄に関東の諸公は觸目し
軍勢を起すもふと結城六郎持朝へ前年持氏のは言色と世承あり
正領結城は誓居てめりける今度のは君の教に入ぬこめりも非を
知らば君の命非ざるあふびと權代恩顧の郎黨を引俱一はは諸翁
も走るりもゆも持氏と斜るんと喜びもいふ言はたんまをせん免ありて
今回の一件を結りもふと持朝をめて是を知らず大に驚たこもふと一色
助中知ると猶もわが諫をやと思ひ君のは言色止りもあふる光景
もあふ事もや穩便も後は一莊車の公を一杯のめりて渡入ると
とも何をもく救ふをせぬ我一人の力に以てんかあるべし直接會も
あふみとせんやうわめと君の命にまじりて斯て関東の諸公の面
も不知し隨ひ走るもあふる軍勢進日甚しきやと鎌倉中も満ち多り
左の及殿これを見れば存ひおぼろと限りもさふも家故と討ら
べと一色詮秀同村家と先年の大ねに三千餘騎をこ上州へはしひけ
まひかんも五千餘騎を率て後念を打ち武藏高安寺小陳よりあふ
安房方此より及びて大に驚た嘆息し天下の大名家の安否今このよふ
極まるに此上の力にせし早馬を走らる京都も行くれば軍家驚くせまひ
俄に及領老臣の人とを召して評定あふお區々かして一變せんと村家斯彼
左の及督義淳斑をおくまひり各の中さゆ知陣一はめれと熟し思惟
とあふ今君代を知らぬもの始めて諸候の心服も分られとみりも兵を起さ
乱れ付より争ふら某がなるとこのは諸候の命せを明近の武士の中を
るべき人を撰ひこれを大に軍にせよまの兵をつけては校を敗るめ又別は邊習

一色詮秀討ておぼろ言詔を巧まきふ流言しむれば

結城六郎持朝へ前年持氏のは言色と世承あり

宿志を遂よと密に旗の教書をとく賜ひじくお坊房かきりなくさむ。
 久く君恩を感佩し。きき家かきりて只顧園をへり。準備せり。こま
 小栗助平の習く洛外八塩山の辺に忍び居りし。関東の乱はささふ
 家お坊房の軍衣の心も心を宣て憲実を救ふはしとせし。めしてその
 手小属一憲実の村も對ひ。一色と討く年暮の宿志を遂む。其
 便宜を常心より。然るに近に天下早くと加茂川の流も涸る。なれば
 洛中洛外の井悉く涸る。小栗が旅館の裏の古井あり。常水
 藍のぶく。涸る。其深さ斗さし。然れども此井あるはば。ささく
 汲となす。てあり。が今早魁の村されども水尚溢る。なり。な。近隣より
 汲くるもの。きき。されども人かきりて汲故。も。深る。もの。なり。し。一日乃夕
 小栗夫婦。流る。旅宿の前裁お出。垣の外面をうららる。隣家の婢女
 水を汲んじ。彼井お珍玉み。ろ。ろ。何をろん。ん。水汲。汲。井の紅を。宛。居。ろ。ろ。
 何る。と。と。尚。ろ。ろ。ろ。ろ。忽ち。身を。翻。て。井。中。墜。り。夫。婦。は。驚。死。人。死。
 味。お。近。隣。ら。ら。集。ひ。助。ん。と。され。ども。及。ら。せ。せ。死。を。汲。ま。く。井。を
 汲。干。ん。と。終。日。人。力。を。そ。せ。と。水。涸。る。ぬ。斯。と。ろ。と。三日。お。至。れ。ども。此。二。も。あ。の
 減。せ。れ。ば。人。く。恐怖。し。此。井。も。亦。神。の。在。を。知。ら。ず。み。ど。り。お。汲。ま。く。修。て
 斯。外。を。稟。し。る。と。死。を。汲。ん。と。尚。強。く。汲。ハ。又。し。つ。つ。四。討。と。り。世。が。ら。ん。
 不。如。止。ん。め。と。足。より。井。圍。垣。を。結。て。人。を。井。に。近。は。ら。志。を。池。の
 庄。司。に。これ。を。怪。し。夫。神。人。を。助。る。ぬ。り。て。祟。ひ。な。る。ふ。今。天。下。早。く。水。汲。を
 患。ひ。漸。近。此。井。の。水。を。汲。い。て。祟。を。な。り。る。は。必。定。神。も。あ。ら。ば。妖。鬼
 悪。の。蛇。と。ん。居。を。止。し。な。る。此。后。怪。れ。ぬ。の。を。え。ぬ。忽。ち。打。殺。し。妖。鬼
 除。ん。と。これ。より。日。毎。彼。井。の。妖。を。窺。ふ。雨。之。日。を。こ。ろ。ろ。夕。晚。井。の。垣。に。迎。り。お

水を汲んじ。彼井お珍玉み。ろ。ろ。何をろん。ん。水汲。汲。井の紅を。宛。居。ろ。ろ。
 何る。と。と。尚。ろ。ろ。ろ。ろ。忽ち。身を。翻。て。井。中。墜。り。夫。婦。は。驚。死。人。死。
 味。お。近。隣。ら。ら。集。ひ。助。ん。と。され。ども。及。ら。せ。せ。死。を。汲。ま。く。井。を
 汲。干。ん。と。終。日。人。力。を。そ。せ。と。水。涸。る。ぬ。斯。と。ろ。と。三日。お。至。れ。ども。此。二。も。あ。の
 減。せ。れ。ば。人。く。恐怖。し。此。井。も。亦。神。の。在。を。知。ら。ず。み。ど。り。お。汲。ま。く。修。て
 斯。外。を。稟。し。る。と。死。を。汲。ん。と。尚。強。く。汲。ハ。又。し。つ。つ。四。討。と。り。世。が。ら。ん。
 不。如。止。ん。め。と。足。より。井。圍。垣。を。結。て。人。を。井。に。近。は。ら。志。を。池。の
 庄。司。に。これ。を。怪。し。夫。神。人。を。助。る。ぬ。り。て。祟。ひ。な。る。ふ。今。天。下。早。く。水。汲。を
 患。ひ。漸。近。此。井。の。水。を。汲。い。て。祟。を。な。り。る。は。必。定。神。も。あ。ら。ば。妖。鬼
 悪。の。蛇。と。ん。居。を。止。し。な。る。此。后。怪。れ。ぬ。の。を。え。ぬ。忽。ち。打。殺。し。妖。鬼
 除。ん。と。これ。より。日。毎。彼。井。の。妖。を。窺。ふ。雨。之。日。を。こ。ろ。ろ。夕。晚。井。の。垣。に。迎。り。お

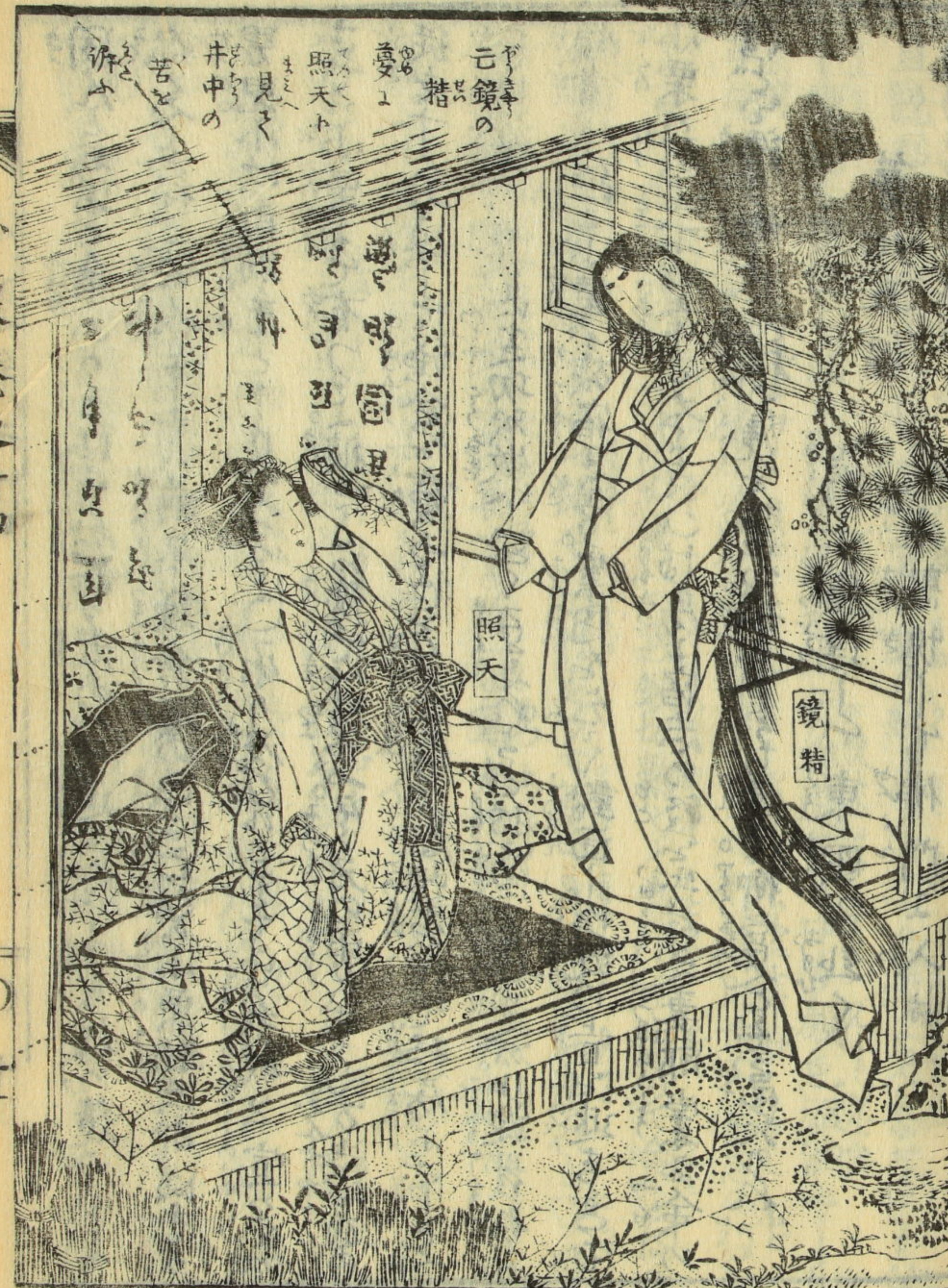
年長二八のりものある女の甚美敷が白綾の小袖は緋の袴はははらぎ
 召ねり。庄司をえて少し恥ぢひつらうめうて顔は背を風情麗き眸を
 明珠のこく輝き絳唇白玉と合眉の楊柳の姿を敷き白の芙蓉花の
 嬌を肌を雪の光を添ふごとく腰の紐を束はし似たり雲間をうて腰の
 月より尚美しく蓬萊宮裏の神女よあふごの瑤臺月下の仙娥天降る
 むやと石に浚肝の庄司も恍惚として夏の如く蒙腫して碎るごとく。茫然
 として言語なく。夢付貪眼を唇よりかきさる。知勇の壮まらん早く放を
 を収め忽ち怖るて想らく。這的古井の妖精めて形変化して人を欺き溺と
 せぬらんぞらめいそ。跡をて怒を除んと躍かかて抜打ふらう。斬る怪ひ
 うお燈火をんぞを消さく。まご入もせ消失より。庄司をな憤り。まごこの
 うへ此井か入。底を捜して討たんと始れ入とせし時。日暮あけとぞ。
 水中のあやもあはつらう。明且と俟て入らんものと。夜をて止りしを。
 討つぬるを念き。終夜を寐もやて井の方を守り居は。井の初文
 りうひより風雨甚烈。樹木を倒し。屋瓦を飛。雨を盆を傾ぬがやく。
 霹靂おびきく震ひ閃電白晝のまごも五文の比おひ。中天雲をるふ。
 照天の院に一人の女性をて。怪しとどひ犯す。くえう。白綾の小袖は
 緋の袴ははらぎ。衆麗な体上着なり。思ひひまふ人。まごを何人ぞと。河
 向の女性。顔首をて。まごを。まごの妻の君を。馴まおひし。鏡の精。前年三羽
 二村山。や美宅の小介。かて。まごを。后武。おの。澤。小介。没命。て。賊。お
 奔。おれ。外。賈人。を。售。まごを。おれ。賈人。を。おれ。密。南。人。と。此。地。方。を。まご。を。おれ。
 る。まご。を。古。井。の。裏。を。墜。入。し。ぬ。此。井。の。昔。より。毒。住。任。者。お。人。と。り。食。ぬ。毒。
 井。を。墜。て。より。只。願。役。使。て。食。を。弁。せ。う。む。彼。が。命。を。お。を。まご。を。おれ。何。責。を。お。

西ノ巻之十四

七

涙のほし其苦痛は涙を止まらして或る色とりて惑ふ。又其宝は後て
 騙し人を欺れ溺れ入る。毒物の食やとも子供を驚かす内の人池庄司
 助長昨日井の辺にまじりてその知らばて例の色とりて欺えとせ。加勇の
 助長妻を好むと猪。一刀の下に殺んとせぬ驚かす知事逃失し命を助長
 易らに思ひ井。入る妖怪を殺さんとも毒龍を勇威を恐怖。昨夜
 俄に此地方を去り其行正を知らざるもあかき妻辛苦を脱する。爾れ
 腥穢な鳩を今井中毒移居らざれば少く入力を用心。忽ち水涸らる
 や。小井中の昔のみを脱し昔のく君の左右に侍しそのや辛くは恩を
 報ひはぬとせんと云終るてまよと想ふ愕然として睡醒とせられ楠柯の
 一夢ならぬ姫と奇異のおひまは。助長あかと告るは其不安で庄司
 を驚し。妻の夢中のそのまよと洋ふは。庄司井の傍中。美人を

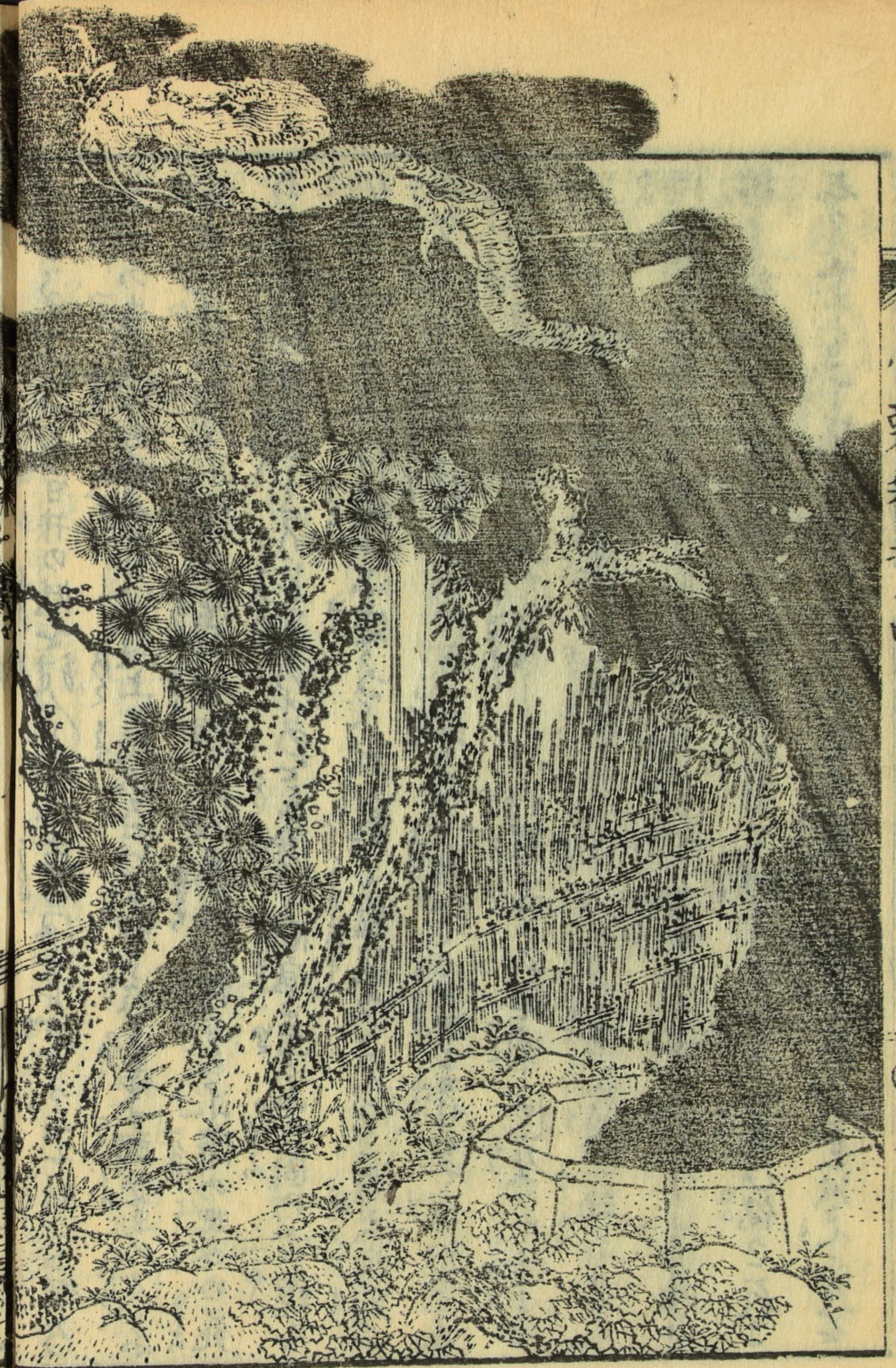
入るるるのうして今日井の奴を討んと志のほを速るるも。照天姫乃
 夢中の昔は恰も符合なり此上は疑ふ事なればと急し郎堂の人も
 命せし。井をあがし。しるふ忽ち水涸るれば。を搜すと不祥の婢女の屍
 あり。其外白骨疊々。その足等ののりも除く尚底に至る。一箇の古鏡を
 びたり泥まみれ。形も不定なる。縁も熟く濯洗あてえ。照天姫前ふ
 小少へ入る。八枚の鏡をそのしる。限りあり。なびて。匣もあけて秘したる。
 此のや誰かやなく。世もあつ。口順。は將軍がこれを圖し。及られ近日の
 早天下の嘆さるる。異も君敷を怪し。高僧知識小勅あり。く。
 西の祈を志すと其驗なり。あり。古井の影出現する。ゆり。一夜の暴雨も
 枯る。苗再生。萬井水く。加茂川の流る。流る。天下の喜びぬ。これな
 志らんや。その。旅人と奈河なる人。古鏡何の縁由ある。志す。



云鏡の
精
照天
見
井中の
苦

照天

鏡精



川新卷六十四



因んとも命のりは付知る者あつて進まなくやなれ。鏡のことと
存せしむと旅人の中まの前年鎌倉屋のめまじひ小栗孫次郎はま
男見小次郎助と申すのうらや。取り及びゆとす小栗我教公宜る
さて小栗も有つて彼がこゝの豫ては及ぶそ月の勇のまじり
従者十人を保して鎌倉を窺ふはと幸あるふは此若くは持房も
家紋を教へては定切に做へ。さぐるまれと持房も命も六
領賞し徑に小栗が旅宿に至り。案内を乞く對面し。此途の旨と述
小栗は然る所の幸と大に喜び持房も宿志の程を告ぐへ妻郎黨も命の
ほどに語り知りし八稜の鏡を携ふ持房と申す連て柳堂と申す
窮士発達し東國に赴く
疑尤慙愧して佛門に入は

第九五編

且説持房の小栗をわく柳堂と申すの如く上へ速く入るは
骨柄を以て威儀嚴然として進退節中り顔色温潤と
英雄の相あれば將軍家にとまじおほく其府持房助重が宿志の程を
授へあけ彼古鏡を上後入るれば義教公熟くと齋いと語りて命を
汝助を何等の故とて此鏡をば持房も其由ある處をお語れと伊
あつた助守謹で名取の家長室よりと寫光横死の后照天小侍り
三列ふして鏡を小女よと武蔵守とく小女亡し附鏡の所在と知
るりし八陸山古井の毒龍の怪鏡の精々中の告により再び鏡を
こゝ其要を摘みへ上まが夫婦が壽偶孝公貞烈の行を感し
宣つと申す此鏡は昔唐の天室手中揚列の奉軍李守泰より水心鏡
一面をなすて清室あると目と輝と鏡背に盤龍を漆する勢

ところらど 玄宗帝 觀鏡のりて甚異し 玄宗帝 觀鏡のりて甚異し 玄宗帝 觀鏡のりて甚異し
 志はる 此鏡 揚州 呂暉と 鏡匠のぬが 一日 鏡を 持て 世 附 白衣を
 多る 老翁 夏衣を 着る 童を 俱して 呂暉が 許す 事ある せき 髪 鬚
 悉く 白く 眉垂く 有る 至る 自ら 名告ぐ 我性 龍名 護し 云く
 侍の 童子 玄宗と 呼ぶ 我 眞龍鏡を 造る こと 詔す 今 汝が 子 孫
 これを 傳て 帝の 意 悔ん とも 此 処を 去る 戸外 牛 小童 玄宗と 名
 爐 入る 戸を 扃居ると 三日 出て 戸を開き 呂暉 入る 入る 入る 入る
 玄宗が 所在 只 疆の 前 一紙の 書あり 之れを 開く 曰 開元 皇帝 聖
 通神 靈 吾 遂 降 社 可 辟 衆 邪 鑿 萬 物 泰 皇 之 鏡 無 以 加 焉 歌 曰
 盤龍 々々 隱 於 鏡 中 分 野 有 象 變 化 無 窮 興 雲 吐 霧 行 雨 生 之 風
 上清 仙子 來 獻 聖 聰 呂暉 統 平 爐 移 於 五 月 五 日 揚 子 江 心 小

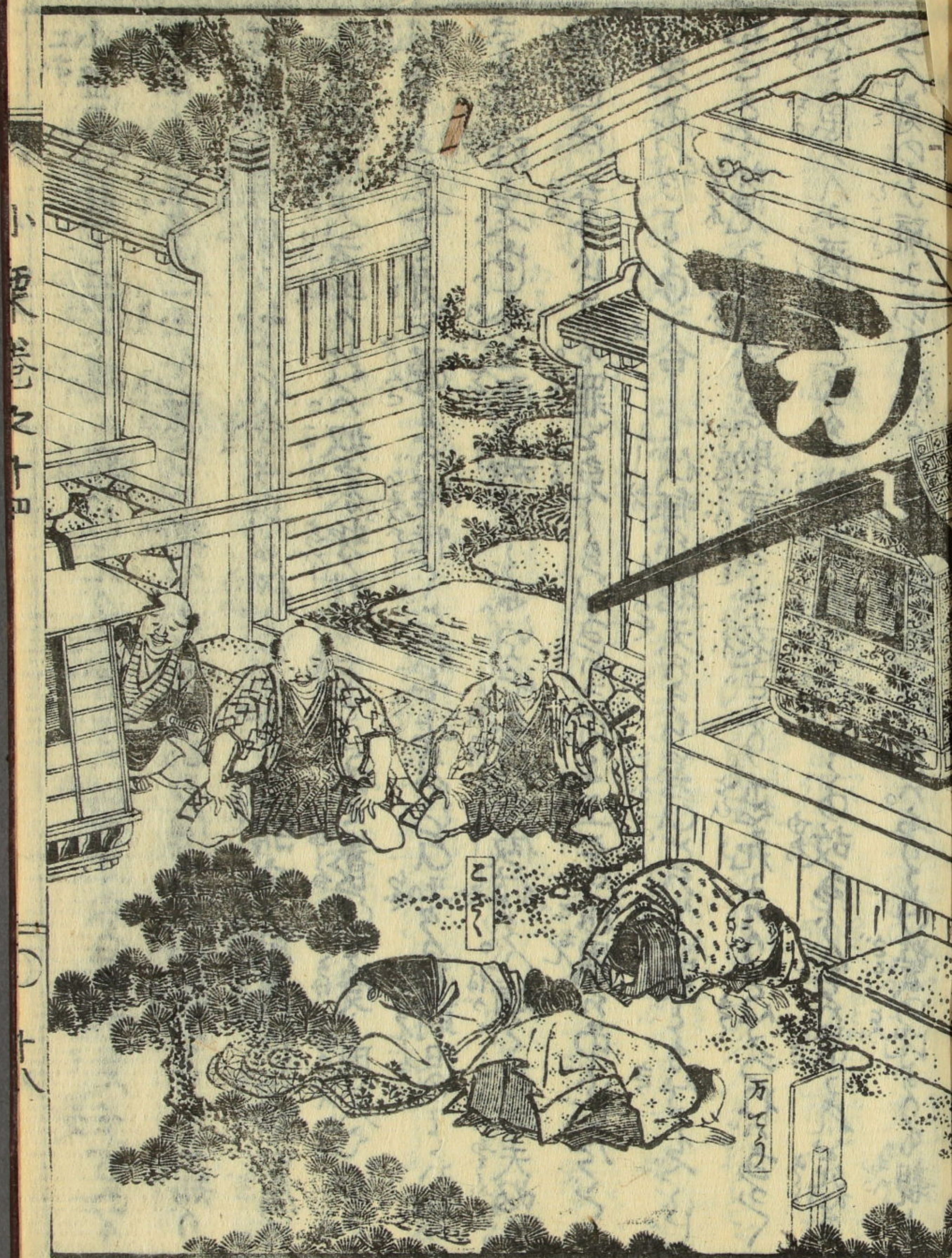
あり 諸 人 之 ぬと 笑へ 帝 在 此 鏡 中 長 室 に 居 其 後
 天下 旱の 附 水 心 鏡 疑 陰 殿 安置 雨を 祈る 須臾 甘雨 大
 小 謝 帝 此 鏡 を 愛 多 一 日 後 水 心 鏡 一 面
 の 鏡 を 造 じ 愛 妃 揚 貴 妃 賜 一 面 此 鏡 あり 其 の け 安 祿 山 の 乱 事
 揚 貴 妃 馬 塊 の 露 上 消 村 此 鏡 の 所 在 と 知 る 事 なる ぬ 是 事 之 星
 霜 を 移 我 國 治 来 平 政 子 此 鏡 を 移 秘 葬 あり 事 不 今 今 今 今
 こと の 不 思 織 事 近 日 の 大 旱 に 高 僧 の 祈 り 甲 斐 あり 此 鏡 の 故 事
 一 甘 雨 降 り て 民 生 の 幸 甚 び 此 鏡 水 心 鏡 異 事 一 雨 降 ば
 天下 再 易 あり 室 あり 民 の 父 母 之 持 持 たり 汝 妻 孝 の 為 中
 事 放 其 去 向 を 知 る 事 再 び 故 事 復 及 び 其 夫 の 宿 志 遂
 遂 事 こと 大 事 なる 靈 鏡 なる 我 こと 汝 こと 又 故 あり 事 事

故に復るべしと思て還しよむと承く宝に兼累をどうぞと。こゝに又
 汝がふ処道理あれが坊房と傷ふ東國への。憲実を救ふを。切あはれ
 おめての尚賞のへと太刀馬と賜りし。小栗年事の宿志一討するの心
 一門他家の面目此上なく。天よまはひ地お喜び感謝の涙せぬ人ぞ。漸所を
 在生る。かてくれが家牧治経大捕坊房と東國を飛向せんと。小栗助を
 借僕々は。助重ハ此序なり。横山安秀と討する。舅の仇をも報りんと
 想ふ妻をも俱せん。とほは陳中へ女奴伴りんと。うふらん。素小はひる
 折らら美室小を郎。ま柳を誘引く。八陸山の旅敵。事りたれ。たふはび
 急に對面と。小を郎。夫婦恙かたを飲び祝し。后おのれ。免濃。あしと
 後世のち東國の方と志ざし。下給ふ。至り賊巢。お宿り青柳。あめり。舎
 そのま。うへ。か。あ。俱して熊野。か。山せし。母と。や。主君。伊。夫婦と
 下め。朋輩の。入。京師。上。り。多。や。父。昨。日。京。よ。出。せ。れ。何。方。お。お。し。ま。は。と
 知。と。公。若。く。ひ。ふ。京。幼。童。の。口。順。く。未。世。と。し。を。頼。と。あり。小。栗。殿。と
 受。へ。る。そ。の。内。の。人。お。庄。司。と。か。し。ひ。る。漢。子。の。勇。猛。ハ。八。陸。の。山。井。は。は。る
 盡。移。忍。と。逃。去。と。一。夜。の。大。雨。お。る。日。び。さ。し。も。患。ひ。早。魃。の。苦。惱。を
 免。れ。び。し。と。庄。司。の。勇。威。お。よ。々。々。然。々。お。此。夜。後。念。及。は。速。報。の
 受。へ。る。お。世。の。執。事。お。ね。む。う。浮。じ。う。彼。小。栗。と。の。發。達。と。鎌。倉。討。の。勢
 お。加。り。近。日。東。國。へ。奔。行。の。と。受。け。ん。庄。司。と。も。俱。し。多。人。毒。龍。お。り。も
 忍。れ。勇。わ。り。必。ぞ。軍。お。ら。勝。世。の。中。靜。謐。お。な。り。お。ん。な。ど。い。ふ。は。な。く。も
 蘇。く。と。こ。そ。此。亦。よ。ま。の。ぬ。と。詳。し。受。へ。上。た。れ。助。を。妻。婦。と。賊。塞。お
 平。け。小。を。郎。奇。計。を。感。賞。し。後。助。重。函。嶺。の。奇。難。の。討。ふ。思。議。お
 照。天。小。介。と。還。合。武。藏。舟。と。て。來。は。る。処。一。色。横。山。お。出。合。小。介。の。主。を

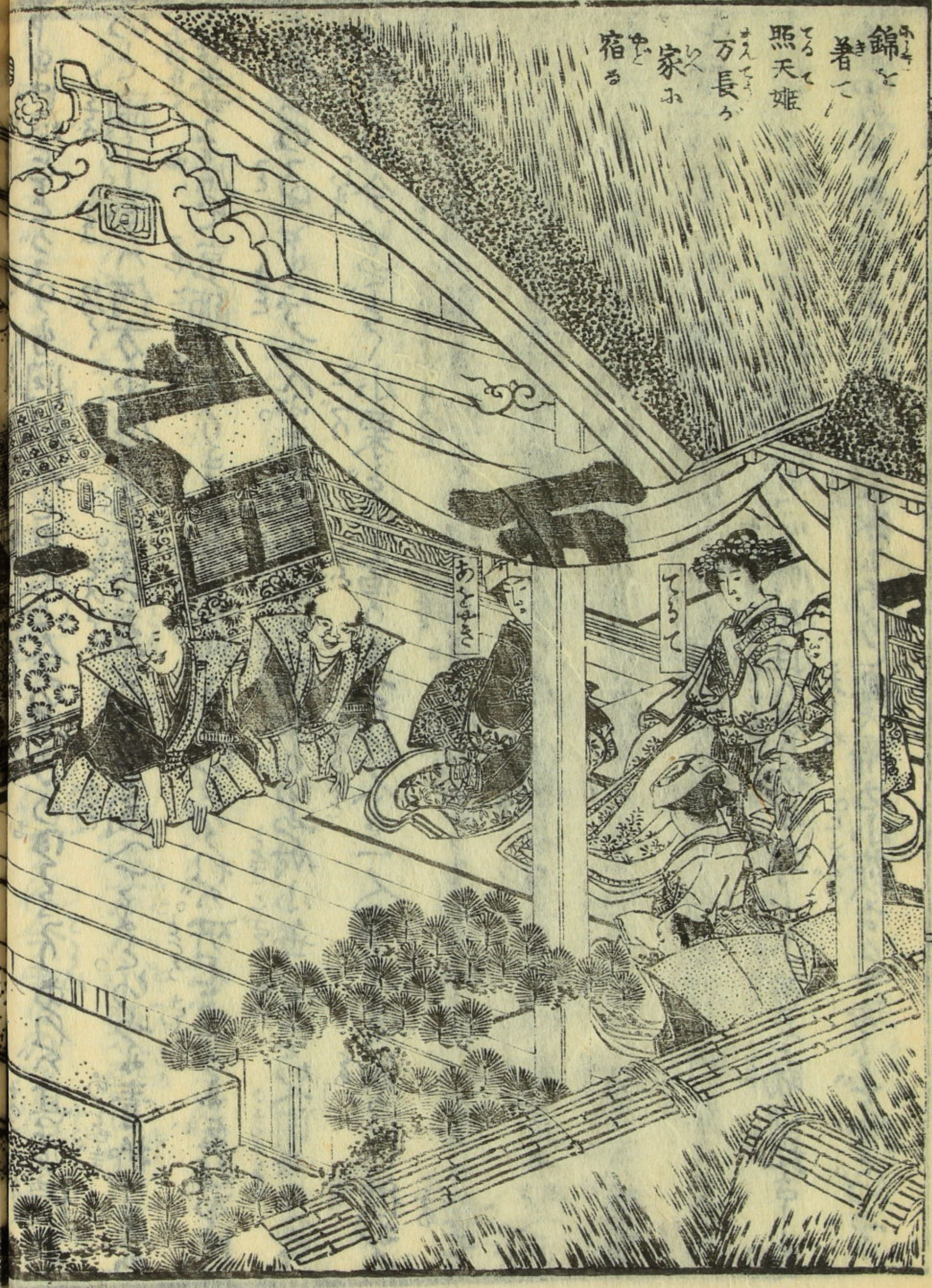
落きんとして討死。照天を夫と負ひて僅に脱し。孫次の上人は還き
 教ゆまじし助言を坐行車かきまゐりて熊野の本宮の湯に入て病平愈の
 こと九人の郎黨を尋ねたりまより京師の生池庄司が勇威のよんで後境
 再び訪るること又境の奇特も。將軍家かえり。御免を蒙りお房と
 偲ふ東國へ赴く。しむ至るまで語らまふ。小を即ち伯父の死を嘆死土の
 高運を。とび庄司が勇境の奇特と感し。斯く。后青柳を照天
 姫おむらひてまゐりては。妾を墓のあり。時姫君も。おむらひ。は。と
 此身の上は。知らざれば。此の限りとなり。は。今と。ありて。其罪逃るる。處
 かし。と。は。前より。あるも。畏く。と。消も。入る。と。付れども。父の仇人。横山を。怨むる
 そら。ら。ら。は。偽。中。の。え。を。蒙。り。し。尚。其。上。の。怨。と。は。姫。君。仇。討。り。ま。へ。る。は。伏。お
 僕。し。と。ま。い。る。は。此。ら。も。な。れ。は。恩。を。り。君。は。奉。意。を。遂。る。は。后。は。怨。人。横。山。を。
 一太刀死せしむ。と。な。る。が。い。う。な。は。罪。も。伏。し。傳。へ。ん。斯。道。行。は。れ。る。は。此。の。と。
 願。き。も。は。は。ら。恐。れ。あ。れ。と。人。の。予。る。の。道。と。は。公。底。を。傾。け。て。笑。へ。お。け
 ち。と。さ。と。赤。心。を。述。く。る。あ。ぞ。照。天。姫。の。身。は。ま。さ。れ。不。便。の。と。入。と
 憐。し。む。い。を。前。の。非。を。咎。ん。た。と。世。祿。の。の。い。も。せ。ま。知。ら。ざ。ら。ば。詮。さ。へ。は。
 小。四。郎。を。り。て。想。を。し。ま。ひ。て。お。こ。と。う。父。と。ら。ら。下。さ。ぬ。の。老。は。て。海。き。恩。を
 受。し。ま。ぬ。と。た。は。仮。初。の。君。信。り。其。子。に。あ。れ。が。お。は。ら。け。お。と。知。り。あり
 と。を。れ。を。せ。ん。ま。と。知。ら。ざ。ら。ば。い。う。と。咎。ん。ま。う。や。あ。る。道。を。中。心。を。と
 い。ひ。汝。が。健。寺。の。考。と。し。ひ。比。ま。れ。る。事。あ。れ。を。お。は。り。し。て。仇。討。り。は。ん
 ぞ。お。爾。多。ひ。ね。と。云。は。れ。ま。お。う。ち。對。ひ。し。う。は。ま。う。ら。ち。此。事。は。と。せ。と
 や。と。う。助。重。徳。及。其。あ。ん。を。信。ひ。て。舅。の。備。え。れ。横。山。を。討。と。く。多。ひ。し
 う。と。い。ふ。せ。ん。陳。中。へ。女。を。偲。り。て。行。ん。と。お。房。の。ま。ま。入。と。憚。り。不。苦。し。く

見入とてやゆとらふ小笹そら不意きてこつねと云はくまき外方とては
 よりのげつふの女肩輿を昇居多くの供へこれと困りこらうる人
 ぞと寝候うち青柳慌忙れなると云いふ内君別とまじして居絶く
 此音同も好くさりし今恙あら光景をみてらうる存かうら
 妻うとてさそ怒ししあへ。され後々意ふあふとて早よつて妻く
 物浩のいづそゆゆく安へすわぐせんはしあうらうはる今主と頼む人の
 京都より吾妻の赴たるあふらう。今夜の宿は此家おと命はへるあふら
 こらうよく羨しるあ人といふ小笹は今夜助重の我家に宿する定めあね
 他人を宿とせざるうらにる青柳あうち對ひくまけりなれおてが
 又の上の宿はまらおまらぬ今夜の宿は素まら此方へ小栗殿の宿はあ
 を知りてのるゆいふ。又知りての幸ふら何手れ今宵の宿をかきひ

やはあてとがゆりも同れんと思へど今らふ方のゆらうゆら其頓備を
 いと剛。今何方お居つるぞ其事むらと聞へてまらうら青柳こらふ
 吾妻の居を京師よ上のまら吾妻跡まらなれ研を定まらむらむら
 これらのゆらゆらへんおまげて今夜の宿をこらあ付小笹はこら又園弁の
 白痴うお今いふとく小栗との宿は他人を一人まらとも泊らじ彼
 方をゆら思ふ鎌倉討手のゆらおり不れあてもあふらふらうら答を
 喜んも知れじとら付肩輿の裡よりてりゆらを受まら奴家あお人云
 解んとをわらひらまおる小笹の勢はこれを見るか桃李却て妬み芙蓉恥
 を食ひ怒るこら静くとま出ら女を威あつて猛らんと武おの内君よこら
 まれてこれゆらゆら平伏まら付女性の青柳の命。小笹を助け起さあ
 見忘らるまはるそのむら此はあまらし豊婦の小萩するを知らむらとらあ

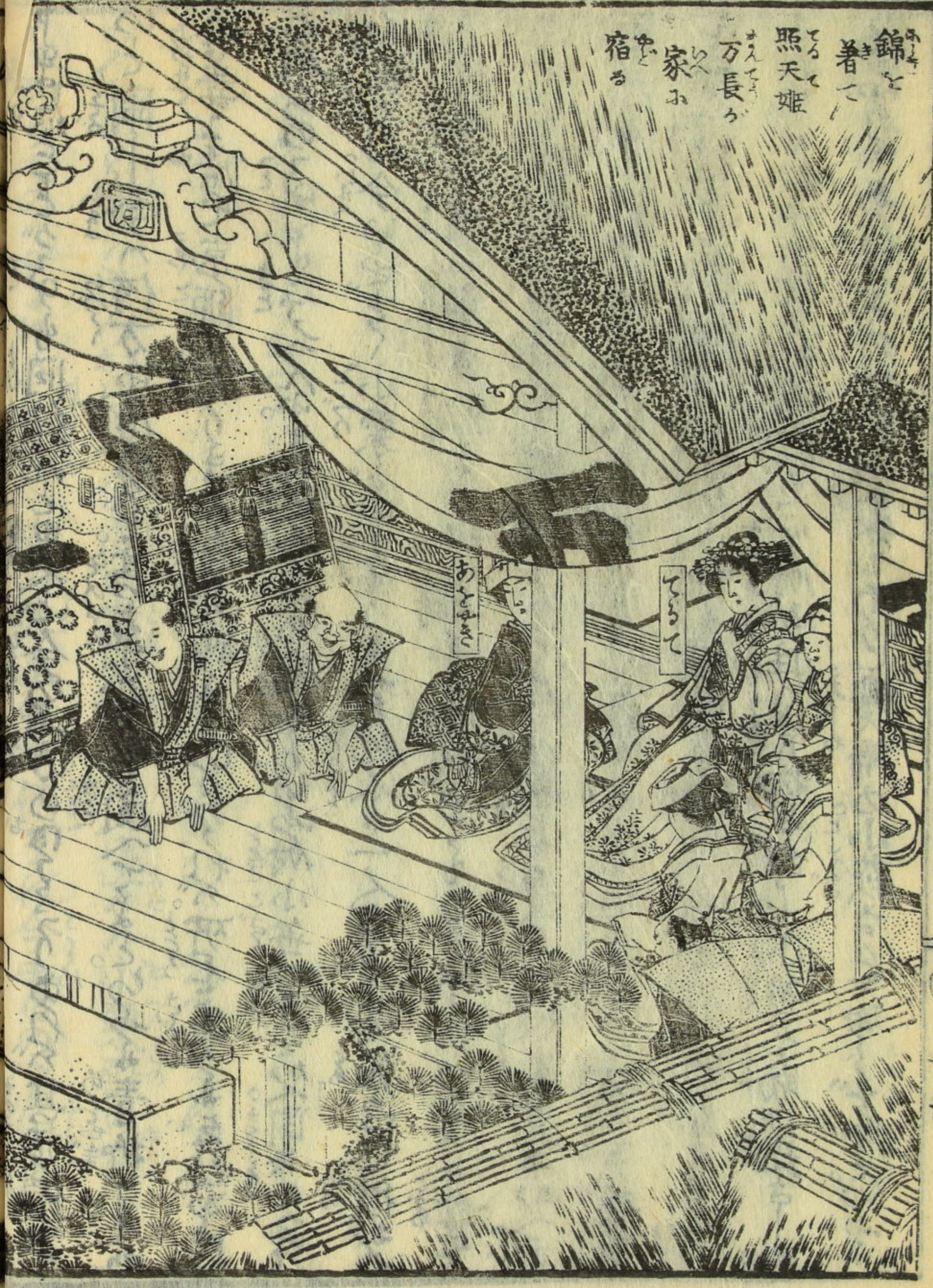
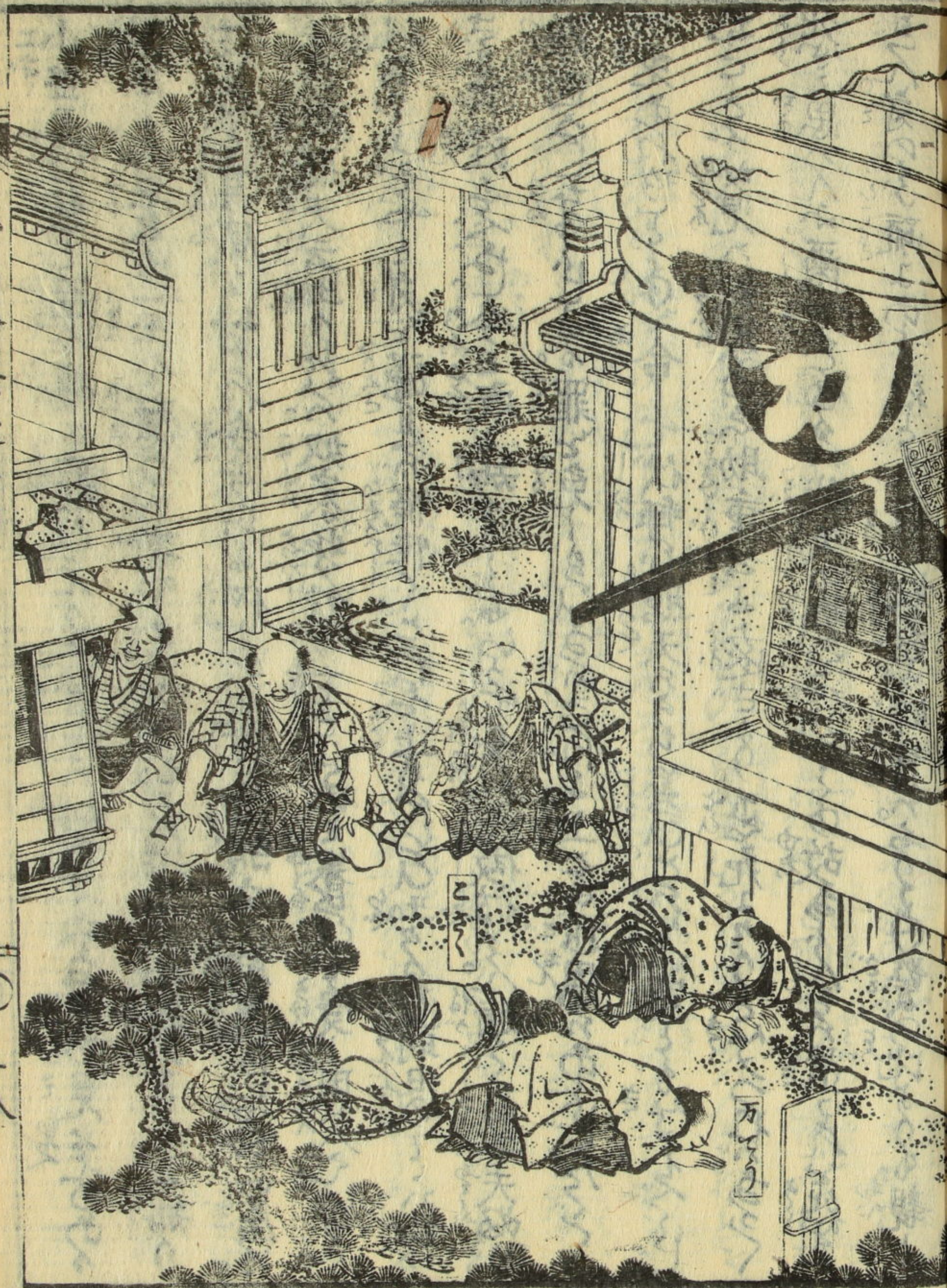


小栗卷之十四



小栗卷之十四

十一



錦
著
照天姫
万長
家
宿

小笠原の侍然と面を揚て窺ひ入るる昔ある似ぬさぬさづら見よとの
 面さし六景多し玉を磨るる斯やあらんとおのほく小萩のつとを知ら
 はとと其威よおそれ今さら何といへき言語を胸裏に畏る居る
 その射照天云出々然の奴家射射も主との養ひと受一恩人といふ
 礼のつとやと身を謙むる慌忙とこれを止めていひ出るる前日のつと
 さと詮とては今日既を知りしつとを我を傲けん類くは安夫婦が
 難面はしなむしる罪を免しひまごころよ上とて恩のあじたぐ
 免われじとま合して伏拜し照天のうちをひとて生実ともせざるじ
 おとら女見の奴家由助重らよ遠ざらり。悲死するつとつねがあぐ
 然と思ひぬ爾はとるの我夫の勢を恐れぬの故るんを置れと死な
 且ん方の多疏よの福とも殿と奴家が妹背のつとつと髪比よりも親と
 親との許し致すけ結びおれする赤繩つと。不圖支家の乱あり夫殿別て
 所在を知ると互に憂を思ひし。今又故も復とて神や仏の憐れつと
 たらつとせりあらぬ不義娘行をるつとの。皇天つとく恵ありんられらと
 ても不美あぬる我精して怨みだれえと俱たり青柳のつと這腹つと
 始終と物詰折る主万長一室の裡を結び出始終のつと渾身ぬいておんを怨り
 さん今さ思ふ浅摺やから賤き生言をもれんを拙て只利のつと思はれぬつと云
 あり貴人次て下婢も追役使つる冥罰めて我女兒を恋ふ死なつと云
 是の何の志も欲より及ん人を女婿として未の栄利をん人のつとありひ
 行なは欲公の做事なれつとくお怨る我ありのつとをせめ人も死
 はのつと我妻よと想つとやとつとつと小笠原つとつと爾は先非
 悔く健言もつとつとつと今より夫婦話とも容貌をか前つとつと世

女児が菩提且我ら此年以作り罪を亡く後世のいづのみなをせしむ
 りあ母万長をひり我ら後其公のれどもおろ胸中いづ母あんと想
 まや覺て心あの人とふの焼くもきしと夫婦先非を悔恨かた
 公翻し菩提の道入のゆる憐れども又女にされ斯くとも母表のこ
 賑やく小栗判官代の出入と里長市の立違ぐ母照天姫いふやうに夫
 ながら今日の徳倉討手の清大おとその入るせまふなるふ斯く居らんを
 れり公の笑ふも畏とされが奴家の別室あつて後刺時を寝たひ夫と入
 おとらがるは女とあつていづ小盛のまひて命至極道理なりいづとあ
 やと前より照天姫と青柳の二人を二室は誘ひ行く行もあつて小栗助守
 近習の輩数十人將て万長が許あ入りて兵隊の兵と青墓の驛
 のうちそれの家あ宿らたりとあめのはいと刑うたり各は処とほて
 漸く母静やうかりも久時助重侍臣や命主と信ひあつてと
 いづ万長これを夢てと前の報をせん今をわゆるいづる夏目
 お逢女いんと地獄の餓鬼が魔王のいふ小栗はくどくや牽つてらしき
 廣庵よおそくも踏踏小栗これを違ふんやいづ母万長又亡心し我
 今夜こそ宿ると汝罪をせんぬき今我らとあよく云解くと汝せ
 其罪を免と汝利欲を違ふるとのあま照天とひく娼婦おせん
 とお母照天節を失ふと法と命に随つてこれを故と謀をりうけ雨よ
 娼婦よ一日毎七電の火を焚く七荷の水汲く七電の草を断
 七桶の茶を汲らませり是一人の力なりてよく及ぶ処なりやとどめりその
 弁がたれを知り其任あ堪はるを罪と強く娼婦おせん為りし照天の
 観世音の仏力なりはしも做好き業を弁せりとて汝たんと

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

不慮と久しく其方小悪とて思杜とや云ん暴悪とや云んかざる非道と
 行ふと豈照天のさあらん尚幾人の斯ははらん曾てまう我世忍び
 居り時不圖とて申すりしを女児が毫も溺れ我をりて女婿おせんと強
 らりしをを辞まふ禍忽ち身及び宿志を果と妨らんを權
 するはしうかひて我方の素けを借し。其辭をたをりて非道
 行ひ人をく不義に墜れし。是此不仁不義の其罪正母死ふ
 たりと既方長が罪を正さうんて後背の紙門におし。用ま
 我まを結多人と云け出るらんれら妻の照天青折と小世
 借ひ申すなり小栗河のつらひのさる我妻やおん方と殿よりお
 へまを此よまらんと申すもと問ふ照天府よりけはる會にま
 殿おはまをのりし昨日人のしを父は明日の殿の宿
 ありしをまはるは澤館のうらふ。万長が許をばし。あ正し罪と
 紀さんとおぼそを精とれが夫婦助けのまをて俄にをさる
 殿は前より世家は宿の最ま主夫婦おも對面して夫婦の若く赤
 衣をまるとほおいと殊勝おも憐れむ殿おんて長夫婦が余が助
 けをて。此種うらふ及べりとま小栗言は語を正し。怨むあはそ
 仇人を助るとかどるを心を怒りと妻の心れをいふれをりて死
 報ひ徳をりて徳報ゆと本文おもとる。范睢が須賈をいふ
 孫秀の石崇潘岳を報ひ。これ本を以てせり。我又直きかんとせんと
 するが。止るも。照天微笑。やえの命實に道理ありと。主夫
 を罪す。お奴家おも。刀心する縁故の。權おも主と。將の。ま
 受し恩。と。又奴家長が許。居る。い。君。再。せん。恩

西入 卷之十四

三十一

二つあり又女兒花見奴を怨みて死亡し。爾よりさうありぬ奴をいふと
 鎌倉のへへ上女兒が仇を報ひてまきと爾よりさうあるは是れ此の恩を
 あり。それ入のゆゑ長夫婦をぬぞかへし意あれ。此等のことか憐れ思
 夫婦を罪を免させり。傳へて韓安國が獄吏を免し。又瀧公が其意勤と怨み
 かりへ人渾とれを賢くし。今君發連門出。此夫婦のりのを助かり。この
 寛仁を何く父招き。人帰伏せし強。夫婦を罪をひらる。奴を一旦の
 恩を是れ代とて思ひ。こみて速く助重謝す。落し。こころのまへ
 ありのり。我意を遂へ。癖とさる。夫婦を罪を免し。入のり。長夫婦
 今我のつてをよ。善れ妻の懐か。あも。道理の。自ら前非を悔。佛道
 志とて。神妙なれ。其罪を免せ。とて。佛門に入。女兒が後世と
 汝が是をて作り。悪業の消滅を祈。と。あま。長夫婦の。照天の

青柳も喜ひ。あ。感附せり。さ。小栗の。翌日。青墓を。鎌倉
 赴け。照天も喜。折を。長夫婦と。袂を。別ら。夫の。殿を。慕ひ。出。り。ぬ。長
 夫婦。小栗。小栗。結。せ。り。く。青。属。財。宝。を。捨。て。衣。着。の。衣。ま。さ。る。と。入。法。堂。の
 靈。場。を。巡。礼。し。女。兒。が。墓。石。提。且。の。又。そ。の。後。世。の。苦。の。外。又。他。の。い。ふ。ま。り。じ。つ
 悪。不。強。の。善。も。法。く。手。を。持。て。道。心。堅。固。の。知。識。と。う。の。修。不。大。往。生。を。遂
 と。あ。ん。且。説。小。栗。助。手。の。旧。悪。を。ら。ど。長。夫。婦。を。免。せ。と。寛。仁。丈。度。の。大。ね
 こと。世。に。垂。り。ふ。じ。仁。恵。の。慕。ひ。旗。下。小。池。の。勢。多。く。勇。威。破。竹。の
 ぬ。く。の。ま。の。奈。國。の。結。候。小。笠。原。信。清。の。政。康。今。川。上。忍。介。範。忠。武。田。等。即
 信。重。朝。倉。小。太。郎。教。景。亦。と。始。と。結。國。の。軍。勢。三。万。五。千。余。諸。將。軍。家。の。あ。ん
 下。知。さ。し。く。も。家。教。坊。房。小。栗。助。重。が。子。を。属。せ。し。か。既。よ。勢。五。万。余。諸
 小。及。び。ひ。び。の。鎌。倉。中。騷。動。し。京。勢。只。今。責。入。と。も。俗。男。女。上。下。下。あ。ん

りて返し買財雜物を西へ運び來り添し有北へ走迷ひ女重の泣けがる
若も満小路をふたへり左馬路敷出陣の留まりの止まり然るべき武士も
るりほとふと連と初まわいせ女房達をばて候とぞひ弁方あり只二ふ
おはし集ひての音小幄秋の虫あつて頼む草草も志捨て弱り果てるあつち
警へん方もさうりけりかたよれの家枚憲実の討ちよ對じ一色式部補詮秀
は形給が補対宗は属する軍兵三千餘騎の司り落らせらん女人が家子
郎夢也世も七十余騎もあはれ此小勢也ていひさうと持氏の陣
あも地ある持氏もまひよりしが臆病りの味方ありて足すといひも落
るこそ耳れとい宣されれ秋の夕晚の風吹散され紅をふらぬ拵も枝も間
かへる哀もいふふたれたる斯てい酒倉のいもさあはしく武義のい
高安寺の陣をい拂ひ酒倉も退りまひる世耐ても結城打朝のい
一人も散ると忠我のいもすていとれは持氏も頼りし思密も入るあぢの
我武運是すところおぼゆい身お替り命も代らんと契り人も耐運と窺
自家の安危を慮り京軍お心をよし退りの十中て八九は汝も汝志氣
改めと傾運の我も忠義とぞとて嫁られ其忠心をい頼べき一ツあり今
禁正を唱めつり至る勅の軍して雜人のいに入る屍の上の恥辱もい
潔く自害せんとせ汝の我子義久と俱と何処もま忍び討の至と俟て世ま在
まめよ是と最期の報ことい候よとれと今も持朝言法を正しこい甲斐をい命
を承つるのい命と縮すあらのあらん某始よりい存せうとい華の
あもん限りの我言の触るつれと精し今日もい一三〇をもい上と抑此回の乱の
起す一色詮秀も枚憲実と漢し君を怒しちまも依國承の患とい成
はれ速く一色詮秀もい助氣あふい忽ち軍家のい怒解京都酒倉もい

川崎巻之三十一

三十一

水奥の山中とてつる人の必死を憂ひ、這回の討ちに小栗助重まうりものほこれか
 前年のゆきまをせりし小栗満重が男見之君の近習ふひし者なれば、
 召あらん彼の老子ゆて父はまの北の君の心より奔りし一色を語言
 依りてとて詮秀を討ちたり。あましくも艱苦勞心して、將軍家の男見を語
 とも某の使をせり助重を陣よりあり、詮秀はゆきまの事を速君の赤心を
 語りゆり、喜んで京鎌倉の和睦を数年、国家安全に討ひしを、
 尚一色が悪事をせえぬとて、持氏とて、一色が悪行を思ひあり
 後悔のおんま色とて、ゆきまを。

